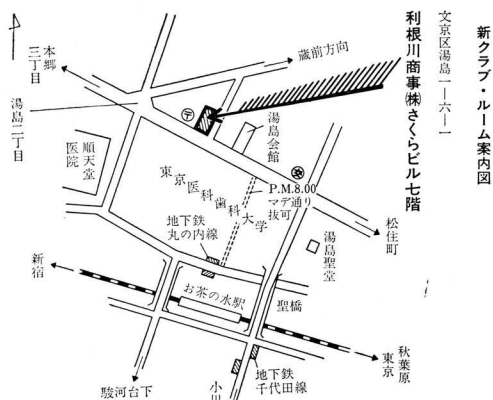




会長 今西錦司氏、副会長 織内、中屋氏 —— 本会のクラブ・ルームも移転 ——

昭和四十八年度通常会員総会終る

去る四月二十一日、午後三時から向井ビル四階会議室で、昭和四十八年度通常会員総会が開かれた。その席上、七件の議案が協議の上承認された。(詳細は次号に掲載) 第四議案の会長、副会長の選任に当っては、新会長は今西錦司氏、新副会長には中屋健二氏及び織内信彦氏が全会一致で選出された。

また、本会クラブ・ルームは去る昭和四十二年六月五降、神田錦司の向井ビル五階を借りて、会員諸兄姉に親しまれていたが、前々から本年五月末までに立ち退く約束になっていたため、候補地を探していたところ、今回、お茶の水駅近くの利

根川商事(株)さくらビル七階を借りる契約が成立し、五月中旬までに移転することになった。本会定款第二条に、「本会は事務所を東京都千代田区神田錦司三の二三におく」と定められているので、ルーム移転に伴って定款の変更が必要であり、この件に関しては通常総会の第七議案として提案があり、満場一致で可決されたため、一応手続き上の問題は終わったわけである。

なお、クラブ・ルームの引越は、図書だけでも膨大であり、また什器、備品も多く、かなり大規模なものとなるので、ルーム移転準備委員会をつくり図書、集会、青年懇談会の各委員の協力を得て、五月六日から十四日までの間に逐次行われることになっている。

新ルームは交通便利
今回、新しいクラブ・ルームに決ったのは、お茶の水駅から東京医科歯科

大学を隔てた湯島通りに面する利根川商事(株)さくらビルの七階であり、交通の便も環境もよいので、本会の中枢として最適の場所として期待されている。お茶の水駅には中央線、総武線の国電のほか、地下鉄丸の内線、同千代田線も集っておりそれぞれの駅から徒歩五、六分で利根川商事(株)さくらビルに着くことができる。(上の地図参照) また面積も従来の向井ビル五階のルームより四十平方メートルも広く、会議室、談話室なども広くとれる見込みである。電話番号は八二三局二八六(代表)に変わりました。図書などは整理に時日を要するため、閲覧できるようにするまでには若干の日数を要すると思われる。新ルーム(本会事務所)の住所は、郵便番号一三三、東京都文京区湯島一の六の一、利根川商事(株)さくらビル七階で、今後の一切の連絡、通信等は、この住所でお願いすることになる。

新ルームに期待しよう

本会が会のルームらしいルームを持ったのは一九三〇年(昭和五年)からであり、その場所は虎の門であった。本会はこの虎の門ルームを持ってから会合も懇親も事務も、飛躍的にスムーズになり、ルームというものがいかに



昭和48年(1973年)
5月号(No. 335)
社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

総会記事	1
集会記事	
山岳史懇談会のこと	2
山日記をめぐって	7
研究	
山と蝶のものがたり(12) 春田俊郎	2
六華俱樂部緑樹山荘 水野公男	4
紀行・随想	
八幡平にひそむ滝の上温泉 村井米子	3
長者舎山荘で鹿肉を食べる会 山崎安治	3
会員通信	
林道という名の観光道路 奥井清	5
グリーンランド便り(2)(3)植村直己	6
五竜岳の元旦 河村栄二	6
信濃支部アナンブルナ登山隊より 松永敏郎	8
図書紹介	
岩と氷河の山々 小倉董子	8
北ボルネオの山旅 湯口康雄	8
連絡	
山岳第67年について 山岳編集委員会	9
国際アルピニスト集會参加募集 海外連絡委員会	9
複写受付事務取扱について 9	
「山岳」復刻版 第二年第二号 7	
会務報告	
日本山岳会経理に関する内規	10
会員異動	11
住所、住居表示変更	9
ルーム日誌	11
図書室便り	10
その他	
辻村太郎氏受賞記念会出席者	10
原稿募集	6

大切なものが深く認識された。この虎の門のクラブ・ルームは惜しくも戦災によって失われ、戦後のしばらくは、固定したクラブ・ルームのない時代が続いた。そして今から二十年ほど前になって、お茶の水の岸記念体育館の敷地内に、山小屋風の独立家屋であった。クラブ・ルームを再び持つようになり、ようやく本会も戦後の混迷を脱して、会の本格的活動に取組むことができたようになった。お茶の水は十数年続いたが、昭和四十年に、代々木に新設された岸記念体育館に体協が移転するに及び、われわれは再び、ルームを失うことになり、止むなく原宿の地下室に二年ほど仮住居して、四十二年の六月に向井ビルに移った。今回また思い出のお茶の水近くに居ることになり、新ルーム中心に会の発展を期待したい。

会費の納入について

本会の会費の納入について、従来の会則では、いつまでに納入すればよいかが明確でなく、大部分の会員諸兄姉は、その年度内に納入すれば差支えないと解釈され、事務局も年度内は特に酷しい督促は致しませんでした。

今回の定款によって、会費は三カ月以内に納入すべきことが定められましたので(第十二条、六月末までに納入することが義務づけられています)、従って未だ納められていない方は、お手数ですが、六月末までに納入されるようお願いいたします。

昭和四十八年会費は、東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県に在住される会員は年額五、〇〇〇円、それ以外で国内に在住される方は、三、五〇〇円(支部費は別)ですから、よろしく願います。

第二十六回ウェストン祭

上高地山岳研究所は間に合わない

来る六月三日(日)に恒例のウェストン祭が催されるが、今回は第二十六回目に当り、例年通り、本会信濃支部が担当することになっている。上高地梓川ほとりのウェストンのレリーフの前で、式典が行われ、その席でエーデルワイスクラブの女性合唱隊が、ウェストン祭のための新曲を披露する予定である。

なお本会の上高地山岳研究所の落成は、水道工事の困難などにより、ウェストン祭には間に合わない。

一九五二年、日本では戦後初めてヒマラヤに派遣されたマナスル踏査隊の隊長今西錦司は、マナスル周辺の高地で若干の蝶を採集した。翌年一九五三年には三田幸夫を隊長とするマナスル第一次登山隊が派遣されたが、それに科学班として加わった川喜田二郎は、カトマンズからボカラを経てカリガンダキを過り、ズードコーラからブリガンダキを下る六ヶ月近くの行程で、相当数の蝶を採集した。この今西と川喜田の採集品は、蝶の専門家である九大の白水隆によって一九五七年に英文で発表されたが、種類は一四三種類という多数であった。

また一九五六年、五七年には、京都大学がカカコルム、ヒンズークシ方面に学術調査隊を派遣しているが、この隊に加わった生物系の学生、吉場、荻野、岩坪の三名も山岳地帯で蝶を採集し、後に同じ白水隆によって発表された。

一九六二年中尾佐助を隊長とする大阪府大のスプチュール隊には、隊員とし昆虫の専門家である保田淑郎が加わり非常に多数の蝶を採集した。また一九六七年の静岡大ブルー・アンデス登山

第一回山岳懇談会のこと

図書委員会ではかねてより日本山岳会の歴史をかかげ、先輩会員諸氏の山における足跡をうかがう集まりをつくりたいと計画していたが、その第一回として、三月二十九日、三枝守博名誉会員をお招きして「山岳懇談会」を開くことができた。

三枝さんはあらためて御紹介するまでもなく、本会の最長老で、いわゆる探検時代の日本アルプスに多くの記録をのこされた方である。初期の「山岳」には「日本アルプス縦走記」(四年一号)「後立山連峰縦走記」(六年

隊には、やはり蝶蛾の専門家である高橋真弓、杉本武が加わり、同地域の蝶蛾をたくさん持ち帰った。これらは登山隊員の中に蝶の研究者が加わった例であるが、一九六三年に日本鱗翅学会からネパールヒマラヤに派遣された筆者を隊長とする蝶蛾調査隊は、カンチエニンガ水河の海拔五二〇〇メートルまで達したのが、登山を目的とした蝶蛾の研究だけの隊であった。こ

山と蝶のものがたり

海外登山と蝶

12 (最終回)

春田俊郎

の隊はネパールの蝶三百種類以上を採集し、新種四種、ネパールでの初記録種三十六種を含めて、そのリストは一九七〇年に英文で発表されている。

現在では採集していない、小さい頃昆虫採集の体験があるとか、蝶に多少の興味を持っている人は、登山者の中にはかなりいるらしく、例えばマナスル第三次登山隊員であった松田雄一は、帰路のキャラバンで蝶の採集をし

(一号)「越中アルプス縦断記」(六年一号、七年二号)などを発表され、すぐれた山岳写真のこされている。また小島島水、高頭仁兵衛、高野鷹蔵、中村清太郎の諸氏とともに明治四十二年の赤石山脈の探索に参加された方である。一月のはじめ、私たちの計画をおたえたところ、氏は快諾され、われわれのまよいにそのお元氣な姿をみせてくださった。参会者三十二名、氏の談話を中心に、登山史をめぐる楽しい集まりであった。

お話の内容は、前号にその一部を紹介したが、明治三十七年の白峰北岳、

ているし、一九七〇年の日本山岳会エベレスト隊でも帰路のキャラバンでは松田を初め、鹿野勝彦、中島寛その他の隊員が蝶の採集をしたため、いつでも捕虫網が二つ三つヒラヒラしていたといわれる。

また昆虫採集の体験もなく、蝶にそれほど興味がないにもかかわらず、少しでも学術研究に役立てばと、好意的に採集してくる登山者もあつて、意

外な方から海外の高山蝶の提供を受けることがある。一九六三年から四名にかけて、西イリアンの最高峰、旧名カリストンツ峰を訪れた加藤泰安は同地域で極めて珍しい高山蝶を多数採集しており、これらは現在では入手不可能で、加藤の採集品が日本で唯一のものである。一九六六年バダクシヤを訪れた安川茂雄も、珍奇な高山蝶を捕えており、一九六七年東京農工大のベル

鳳凰山、四十一年の燕岳、四十一年の後立山の登山をはじめ、五竜岳の命名のいきさつ、湯保噴湯湯丘の叢石のことなどとともに、往時をしのぶせる写真をしめされて、参会者一同、ふかい感銘をうけた。また本会の創立発起人である小島・高頭・高野の諸氏との交友や初期山岳会運営の実態を語られ、あるいは辻村伊助、辻本満丸、中村清太郎の山旅のありさま、武井真澄作製になる会員章にまつわるエピソード、はじめて使用した天幕のことなど、興味ぶかい歴史的実感をたしかめることができた。

とりわけ氏のお話のなかで、登山史上の事実を発見したものは、この会の大きな収穫であった。三枝さんは小島島水の「甲斐の白峰」(『太陽』明37・2)を読んで、北岳をめざしたとのことだが、明治三十七年の北岳登山は日本登山者によるはじめての記録にほかならないであろう。御池小屋にウェストンの筆蹟を見出したとの話もおもしろい(ウェストンは第二回目の北岳登山)、高松誠・伊達九郎両氏の記録以前に、氏の足跡があらわされていたことは、日本登山年表にあらたな一行をくわえることにはかならない。

この日の談話の全容は、氏の御校閲をへたのち「山岳」に発表される予定。

図書委員会では、十月の山岳図書交換即売会、十二月の「この一本展」、二月の山岳図書を語る夕べなどをはじめ、会の行事としてさまざまな集會をおこなってきたがこの山岳懇談会もそのおりに計画していきたい。三枝名誉会員に厚くお礼を申し上げるとともに、会員各位の御協力をあおぎたいとおもう。(近藤信行)

(近藤信行)

当日の出席者は次のとおり(順不同)
藤島敏男、成瀬岩雄、名須川浩、三枝守雄、織内信彦、古沢雄、山崎安治、越田和男、河野茂雄、滝川清、齋藤桂、伊藤博夫、野口成男、村井米子、和久井正明、高木武夫、安川茂雄、柴崎嶺、木下和郎、須田紀子、高野光雄、近藤信行、横山厚夫、河野悠二、千葉得之、油谷次康、武田満子、嶋原啓佐、北沢清行、埴山毅、島田巽、勝川直子、吉田広明、松岡真雄、野口末延、山本良三、高沢光雄

八幡平にひそむ滝の上温泉

村井 米子

乳頭山から瀧の上へー

戦後すぐの昭和二十四年、武田久吉先生と八幡平のぼった。宏大な夏空のもと、打ち拡がるアオモリトドマツの樹海の見事さ、原始的な景観に感銘を受けたが、二十数年後の今日は、すっかり車道に伐り開かれ、観光開発の魔手に荒らされてしまった。

しかし、幸いに南西の山ふところにひそむ瀧の上温泉のあたりは、深々と樹林にかこまれ、滾々とあふれる豊かな温泉が川と流れ瀧と落ち、人里遠い秘境のおもむきを残している。

一昨年の秋、折からま盛りの樹紅葉の、紅に黄に映える美しさを満喫しながら、まだこんな山の湯があった！、私はよこんだ。

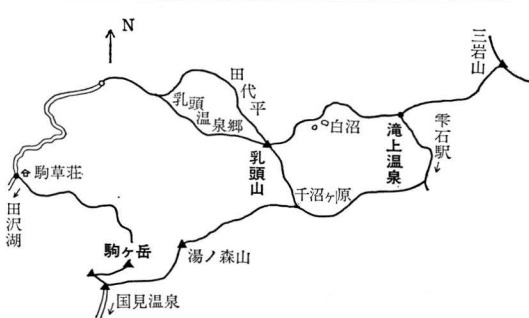
とはいっても、豊富な温泉源を何として見逃そう、地熱発電の計画が進んでいるから、この静寂さも長い命ではあるまいと惜しまれる。それゆえに私ひとりであって置きたいところだが山仲間にとつと御披露しよう。

瀧の上温泉にいくのには、やはり乳頭山にのぼって、山麓の昔ながらの湯治場気分にあふれながら、山上の大展望を先ずたのしみたい。

八幡平から南望すると、秋田駒ヶ岳から北へ走る尾根に、ぽつんと乳房をあげたような乳頭山は、僅か一四七七・五メートルの標高ながら、四周を見はるかす大観にめぐまれ、ことに緑たななる北方の眺めがよい。

ここから見る、まだ樹海のおもむきをもつ南八幡平が、長いゆるやかな緑の後縁を起伏させ多くの谷を抱いている。北八幡平のごくむぎんにえぐり込む車道の見えぬのが救いで、東方に岩手山が立ちあがり、長い裾を美しくひくところ、小岩井農場がひろがるのも、牧歌的風景である。

朝の田沢湖駅下車、バスで乳頭温泉まで一時間十分。途中の高原から見下す田沢湖の眺めは、その透明度を示す碧の色が印象的だ。歩くのは、黒湯ー一本松コースで二時間半、カニ湯ー田代平コースで三時間、最後のひと登りで乳頭山、別名烏帽子岳に着く。山



上の石楠花は低く這って、黄花草と思いが白山石楠花のよし、よからぬ植木屋がキバナシヤクナゲと称して売っている。

もし健脚に自信のある人は、或は高原で下車して秋田駒ヶ岳(一六三七・四)に登り、長い尾根伝いして来るといい。

乳頭山上からは下り一方だ。早く温

泉に思ったら北方、尾根すじ伝いで二時間あまり、残雪の花がよかつたら千沼ヶ原をめぐって四時間。コマクサやヒナザクラなど湿原植物の可憐な美しさ……みなの山のたのしみがある。

瀧の上温泉は、葛根田川の上流、見事な湯濁、鳥声の滝(鳥越の瀧)のところにある。北に負う八幡平の三ツ石山から大深谷、また関東森、曲崎山、大沢森、大白森、田代平、乳頭山の樹林に三方を囲まれ、それから流れ出る数多くの支流をあつめ、豊かな熱泉が湧いている。いかにも、山深い心地がする。

雪石町の中心から遠いので、冬は閉じ、夏だけひらく温泉として、国民宿舎滝沢荘のほか五つ六つの宿が、ひっそりと森に抱かれ、素朴な味わいを保つのもうれしい。

三ツ石山から八幡平へー

瀧の上温泉からは、壮大な玄武洞を見たり、網張温泉や小岩井農場へ寄って盛岡へバスや田沢湖の便もある。

晴れたら、もうひと歩き三ツ石山荘まで二時間、三ツ石山頂まで登って展望をたのしみ往復一時間、また下山一時間で八幡平の松川温泉に達する。また尾根伝いで、網張温泉へも出られ

長者舎山荘で鹿肉を食べる会

山崎 安治

た。

鹿肉のさしみを食べに丹沢へ行かないか、との成瀬岩雄さんのさしみに乗って、早速出かけことにした。土、日は混むから、日、月にしようということで三月十一日の日曜日新宿駅発零時八分松本行きの鈍行列車は、全くうそのようなガラ空き、ゆうゆうと腰をおろして藤野駅で下車、バスで青振まで、そこから長者舎山荘からの出迎

る。

松川温泉にはすでに地熱発電の二万キロが完成し、なお次のボーリングにかかっている。一昨年はここから尾根越で網張温泉への車道を作ったばかり、もう出来たろう。二十年あまり前に網張から登る道も、雪石の青年たちが根曲竹を刈り分けて作ったばかり、大松倉岳の尾根に立って、人跡未踏のふかふかと樹海につつまれた原始境に感激した私には、あまりない開発はうら悲しい。

とまれ松川からバスに乗れば、東北本線的好摩駅か、盛岡駅へ一時間余の便利さにはなつた。瀧の上の素朴さがひと山越えるとお光地気分になる大差も、現代世相の一断面であろうか！、地図(五万)田沢湖、雪石、八幡平、コースA 田沢湖線田沢湖駅ー(バス一時間十分)乳頭温泉ー(徒歩二時間半)乳頭山ー(徒歩二時間、又千沼ヶ原を経る)四時間)瀧の上温泉

B 乳頭温泉ー(徒歩三時間)田代平 乳頭山ー(バス三十分)田沢湖高高原ー(徒歩三時間)秋田駒ヶ岳ー(徒歩四時間)乳頭山ー瀧の上温泉

岩手県雪石町瀧の上温泉

長者舎山荘で鹿肉を食べる会

山崎 安治

た。

日はまだ高かったが、かなり冷えこむ。岩佐、周布の御両人は途中下車して小舎までハイキング、小舎の前で河原では板倉教授が流木を集めて盛んにたき火を始める。それではというので火のまわりに集まって中屋名教授持参の「ブラック・アンド・ホワイト」に前祝いのメートルをあげた。

本会会員の西堀榮三郎氏は、南極地域観測隊長としても、雪山讃歌の作詞者としても知られているが、目下、京都大学土山岳会のヤルン・カン(カンチンジュンガ・ウエスト)登山隊の隊長としてネパールで活躍中である。西堀氏は出発前「僕はベールスキャンプ隊長ではなくて、登れるところまで登る」と述べて、元気なところを見せられた。

西堀氏が恐らく海拔五千メートル以上におられた去る四月二十九日に勲三等旭日章が授与された。慶祝！

夜はシシ鍋とお目当ての鹿肉のさしみにいよいよメートルをあげたが、小生は早々にダウン。佐々木、周布両嬢に寝床へかつぎ込まれたらしいが、すでに前後不覚であった。

翌朝は、所要のため中尾、板倉、伊倉、岩佐の四人がすぐ帰京したのを見送ってから、成瀬、織内、近藤、坂下、佐々木、周布、山崎の一行七人は大越路を越えて箒沢に下った。

大越路の近くから雪がひとひと降り出し、たちまち雪景色と変わり、なかなかのおもむきであった。昔武田信玄が犬を先頭に小田原攻めの折り越えたという大越路は東海自然遊歩道の展望台となっていて、立派な無人の小屋が建っている。

箒沢への道は、昨年の暴風でひどい荒れ方である。東海自然遊歩道もずたずたになり、谷という谷は岩雪崩ですっかりうめつくされていた。箒沢では有名な樹令二千年の箒沢は無事に残っていたがあたりは山はだにはすっかり出て、夕刻帰京したが、まことに楽しいハイキングをリードしていただいた成瀬さんと、長者舎山荘主秋本正樹氏に厚くお礼申し上げる。

六華俱樂部緑樹山荘（青木山小屋）の記録

水野公男

かねて五色温泉宗川旅館に所蔵されている、六華倶楽部の記録を三月二十五日に訪ねた折りあちこちさがして見つけ出す。

記録は六華倶楽部宿泊帳（大正十四年一月起）、黒表紙の自由帳と四冊の六華倶楽部芳名録の計六冊である。

六華倶楽部には最初から関係されていた横有恒氏に御尋ねしたところ、当時秩父宮殿下のスキーコーチをしておられ宮殿下がスキーをされるのに宿泊に旅館を気軽に利用する事も出来ず、始めは赤倉の細川家別荘を利用されていたが、六華（雪の結晶）倶楽部がつくられ、後に倶楽部で五色に緑樹山荘とよばれる青木山小屋を建て前進基地としてスキーを楽しむ様になったのである。

したがって会員には宮内省関係者が多く、後に学生なども利用した事が記入されている。

書きしるされている内容も紹介して見ると

まず最初に自由帳の中、表紙裏に規則が次の様に書かれている。（原文のまま）

「五色温泉山地ニ於テ『スキー』及諸種ノ体育的『雪上運動』ヲ練習セントスル同好ノ會員ヲ以テ組織ス。」

會員及会費ニツイテ、會員ハ特別會員ト正會員ニワカチ、正會員ハ百名ノ定員ヲ入金金拾圓ヲ納入シ、会費トシテ毎年金拾圓ヲ拠出スル、特別會員ハ評議員会ニ於テ決定サレル、六華倶楽部規則（大正十三年七月制定、昭和五年三月改正）六華倶楽部内規（昭和五年三月改正）がしるされている。

次に青木山小屋（緑樹山荘）についての案内文がのっている。

青木山小屋

六華倶楽部評議員会の決議に依り
昭和七年十月落成

「青木山の旧山小屋の東に隣接して今度新たに倶楽部所属の山小屋一棟を建てました同所は五色温泉から約式里の山奥にありて、途中には賽ノ河原への急峻なる坂路ありまた四郎右衛門沢及び蟹ヶ沢の溪谷ありて建築材料の運搬には極めて困難なるため寧ろ山地に於て材料を求むるの得策なるを認め、福島市、外八ヶ町村の所有に係る家形山下の共有林木払下を受け本年三月立木約三百五十本を伐採し積雪を利用して、山小屋建築位置の付近まで搬出せしめ、五月雪解けを待ち現地にて製材の上、七月下旬より建築工事に着手し八月末に至りて竣工したのであります。

山小屋の建築位置を同地に撰定したのは第一、地勢上積雪のため山小屋埋没の憂なきこと、第二、家形山の山脚にありて標高千四百米雪状雪質共に良好にして付近一帯「スキー」滑走に適すること、第三、嚴寒積雪の候と雖も凍結の虞なく常に滾々として流る、清水あること、第四、五色温泉より特設電話の連絡あること等であります。

新築山小屋の設計製図等に就ては当倶楽部の會員たる関根要太郎氏の多大なる御配慮を煩わし又工事の監督実施には幹事自らこれに当り直営工事として建築したので建坪は僅か二〇坪に足らぬものであります、建物全体が最も念入りに築かれた「コンクリート」床の上にて建てられしかも「コンクリート」面上は全部「アモライト」塗り、又外板はすべて防腐剤塗りとしたので外部から湿気を引く憂は更にありません、特に保温と衛生と山小屋気分を失

わぬことに留意し、薪を用いる大なる暖炉を据付けた食堂兼談話室あり、寝室としては暖簾にて仕切り畳四枚ずつ敷きたるもの階上階下に分ちて四室あり、炊事室も浴室も「スキー」手入場もあり衛生設備には取分け注意を払つてあります、又乾燥棚の設備もあり薪貯蔵倉庫も付属してありますから同時に二〇人位の宿泊には差支なきのみならず、寝室は上下四室になっておりますから婦人達や年少者達のためには専用の一室を提供する事も出来ず、勿論風雪荒天等の場合には必要に応じ三四十人位の避難者は優に収容宿泊せしむる事も可能であります。

五色温泉から青木山小屋まで「スキー」つづける登行往路は、賽ノ河原までは稍々急なる登路であります、その他概して緩徐なる爪先登りの極めて楽な行程でしかも帰路には青木山から五色まで全行程を通じ殆んど降り坂のみで滑走又滑走「千里江陵一日還」の概ありこれぞ独り「スキーヤー」にのみ満喫するを許された天資の甘露であります。

清六平の「スキー」練習場にも會員S氏の御厚意により今度立派なる休憩小屋が出来上りました。また五色の倶楽部から清六平への通路を改修しましたので婦人達や年少者達も楽々と行かれる様になりましたので、高倉練習場の休憩小屋と相持つて、練習者に多大の満足を与える事と存じますから會員並びに御家族方の大挙して御出かけを切に御勧め致します。

昭和七年十月 六華倶楽部幹事「引き続き次の行には宿泊代、食事代等が明示されていた。

會員及びその家族、同行者は一人につき一泊三食付で金一円二十銭、朝食、昼食、夕食それぞれ金三十銭を山小屋管理人（作松氏板谷の住人）で五色温泉の備人で管理を依頼されていた」に支

払う様定められていた。

評議員（イロハ順）

会計幹事 細川 護立

同 坊城 俊良

同 渡辺 八郎

同 相馬 孟胤

同 土屋 正直

同 黒木 三次

同 山口 嘉七

同 前田 利男

庶務幹事 横 有恒

庶務幹事 横 芳徳

事務所 西園寺八郎

と記されている。「六華倶楽部宿泊帳」の中からひろい出して見ると、

大正十四年一月九日

黒井倭次郎（六〇）

坊城 俊良（三三）

大正十五年一月四日

横 有恒（三三） 橋本静一（三三）

早川種三（二九） 豊田国臣（二九）

渡辺兵力（二三）

大正十五年三月二十二日

朝香宮孚彦王 竹田宮 北白川宮

西園寺不二雄 甘露寺 忠長

三田幸夫 佐藤久一郎

昭和三年一月二日

伊集院虎一（三〇）

昭和三年十二月二十八日

串田 孫一（一四）

昭和四年二月十日

浦松佐美太郎（二九）

松本 重治（三三）

三月十九日 細川護貞（一八）

十二月二十九日 横 有恒
十二月二十九日 北白川宮 朝香宮 竹田宮
細川護貞 佐藤久一郎
昭和六年二月十日 西園寺公一
昭和九年一月二日 松平慶民（五三）
一月五日 白洲次郎（二六）
三月二十日 鹿子木貞信
昭和十年一月三日 横 智雄
昭和十一年八月十五日 須賀太郎
昭和十一年十二月二十九日 中屋健次（二四）
3 April 1940 ウィンクラー
昭和十三年三月 堀田弥一
小原勝郎
昭和二十四年七月十八日
昭和二十五年七月二十一日 武田久吉
岡田紅陽
等の方々の名が見られた。
自由帳を開いて行くと万年筆や鉛筆で思ひのままだ記されている多くの文章の中から次にひろい出して見た。（原文のまま）
昭和七年十二月二十八、二十九日新築小屋開館
十二月二十七日五色六華倶楽部ニ成ラセラレタル 澄宮殿下、朝香宮孚彦王殿下、東久邇宮盛厚王殿下、高松宮殿下、竹田宮殿下二十九日五色六華倶楽部ニ成ラセラレ即日
当青木山小屋（成ラセラレ御宿泊遊バサル依テ此日ヲ以テ記念スベキ光栄ナル小屋開キノ日トナス
横有恒、佐藤久一郎の署名もあり。
昭和八年一月二日
元旦の午後十一時十五分上野発の汽車にて満載の「スキーヤー」と共に五色に向ふ二日午前七時五十四分板谷着支店にて朝食後六華倶楽部に小憩の後登

行当小屋に着せしは二時過なり。

串田 孫一

昭和八年一月八日九日

一月八日午前四時五十分、板谷駅着。闇を衝いて五色温泉に上り、六華クラブの客と成る。午前中スキー練習午後三時、五色出発、折からの吹雪を冒して青木小屋に上り、黒井大將の緑樹山荘に入る。時に五時十分。

八日夜より九日朝にかけ吹雪益々猛烈。緑樹山荘は微動だにせず、流石、黒井大將の念の入らるものと感心したる也。

鹿子木 員信

健日子

昭和八年三月十九日二十一日

久々の思ひて青木に来る、雪質良、四圍状況申分なくほんとに青木小屋は立派なる事居心地よき事作松君の忠実なる事等すべて旅情をなぐさむるにたる茲に更に幹事の労を多とし敬意を表す。

西園寺八郎

昭和九年三月二十一日

渡辺兵力、中屋健式（モシヤ、ラクダ、オメンイラズ）ダッピン、イマダ、ヨネマン、ネコ

成蹊組八名。

晴天なれば、中吾妻に行かん、前夜から張り切って居たが相変らず雪、風共に激しいので出発が次第におくれ八時半頃出発、十時二十五分家形頂上に着き、すぐ帰路につく家形の肩より約一〇〇米上の付近新雪が吹き降り小な板状雪崩が出た、山荘着は十一時十分頃、午後は天候が依然悪いので、ノビてしまふ。

兵力

残留は家形へ伺ふ予定なりしも雪悪く不快なり。己を得ず午前十時過ぎ下

山に決す。

入山以来黒井さんを始め同宿の諸氏に種々御世話を受けし事を感謝し、併せて成蹊組の無礼を謝す。

中屋 記

昭和九年十二月二十八日

高松宮、澄宮閣下五色を経て山荘に御成、午後二時四十分、晴、御小憩の後、家形小舎への途中を中ばまで御登

行。

二十九日 雪

午前八時半小舎御登、先ず家形の頂上にスキー御登山、次いで五色沼を経て一切経へ向はせられ、肩よりスキーを脱して頂上に登らせらる、降雪のため眺望なかりしも珍しく風なし、一時四十分。

二時頂上登、御下山につかれられ、

峠において御小憩の後、一気に滑降、

三十分前家形小舎に御着。折しも

竹田宮殿下、朝香宮彦彦王殿下の御

登行に会せらる。小舎付近において御

練習約一時間。四殿下御揃ひ御下山四

時四十五分山荘に御到着。雪やまず、

夕暮迫る。山荘御泊り

三十日午前八時半御登、五色へ、晴

横 有恒

黒井梯次郎

渡辺 八郎外

昭和十年三月二十日

松本馨教授に捧ぐ「アブクの歌」

小本曾 宏謹作

一、あぶくの頭は毛がまばら

へつぱり腰につた袋

三本足で直滑降

ああ又転んだ助け船

あぶくは体をもてあまし

ボーゲン出来な悲しさに

悲願干回転んでも

まだまだできない杖ボーゲン

三、あぶくは料理が得意

きのふは芋むき葱を切り

出来るは今日もバズツッ

毎日毎日バズツッ

（尚この歌は作松チャンが薪割歌として歌ふ筈）

昭和十年十二月三十日

安田竜司家形中腹で空腹の余り屋敷中「物の判断力」を失ひ、右手のパンを口に入れたつもりで、帽子の「しころ」食ひ「どうも固い固い」と絶叫、人に云はれて気がついた。

（訂正 自分でちゃんと気がついたんだから偉いものだ）

昭和十一年三月二十日

鉄道省のコーチを終る。

本日をもってスキーコーチは一生やめた。五色迄往復して食糧を仕入れた。島野嬢をそそのかして梅森を下らんとす、ブレーキには大庭氏、荷かつぎに島野嬢それに中村君、これで天気が悪ければもう目が出ない事になる。願はくば暖気ラム雪我等のツアーに恵あらむことを。

中屋 健式

昭和十一年十二月三十日

先ず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

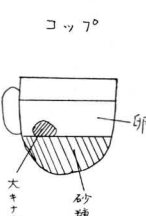
まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。

まず「其辛さ」を讀者のみにこませるにはパーセンティジを示さねばなりません。



右の割合により出来た卵汁が「フヨウハイ」の「卵トジ」の材料であり、「ハムライス」の上にばらまいた所の卵焼であった。

一時間半の後、濛々たる煙の中で、この料理を食べた努力こそ涙ぐましいものであった。

「自分で作ったものは食べて見せるよ」と角砂糖を入れてきれいかたつけたのはジンで、焼卵を箸で取り除きながら空腹を満たしたのは依岡氏と小生

である。

全部たいたらげた後、腹の底よりこみ上げて来る笑ひをおさえる事が出来ず三人顔を見合わせて大笑した。

横 元郎

昭和十二年三月二十日

午前九時ベルグヒット倶楽部の連中と共に五色登、正午当地着一泊

横 智雄

昭和十三年二月十二日

吹雪 歌子

五色宗川旅館AM・九・三〇、当山荘PM・〇・一五、家形小屋往復。月すばらし。

十三日 快晴

当山荘AM・九・二〇吾妻山荘九、五〇家形小屋二〇、〇五一一〇、三〇家形山肩一、〇〇頂上一、三〇一PM・〇、一〇緑樹山荘〇、四〇頂上付近風強し、PM・二、三〇下山。

小原勝郎 尾崎保夫

三月二十一日

午後二時当山荘着天気良好なり雪質ザラメ、夕刻より細い降雪による。

二十四日下山の予定。

当山荘の設備とよきふん囲気に全く愉快な日を過ごす事が出来た事を深く感謝す。

小原 勝郎

六華倶楽部芳名録には、崇仁親王殿下、東久邇宮盛厚王殿下の御署名も見られる。

五色温泉宗川旅館を訪ねる機会があればぜひこの記録を拝見させていただく事をおすすめしたい。

林道という名の観光道路

筑波山ときくと、土産物店や旅館がぎっしり並び、舗装された立派な道があつて、車やオートバイがひっきりなしに通る、山へ来たというよりは、安っぽい観光地へ来たという印象を持たれる方も少なくないと思います。しかし、北筑波はゴミだらけの表筑波とは大がいに、関東平野にもまだこんな静かな山が残っていたのか……と思われ程の美しい山なのです。

湯袋峠から、上曾山（ウワン）足尾山、加波山まで二十数キロメートル。山道としてはかなり幅の広い、なだらかな稜線が続いています。稜線から日光白根まで眺められる景色もなかなか雄大です。この道は、道のまん真中にフキノトウが顔を出していたり、きれいな飲み水にしてもいいような水の沢がいたる所にあつて、沢にはサワガニやサンショウウオも住んでいます。秋にはキノコ。春にはワラビ、ゼンマイがたぐさん顔を出してくれます。しかし、この楽しい山道も、もうすぐなくなつて、林道という名の観光道路になり、表筑波と同じような観光バスや乗用車が通るようになるのです。開発という名のものと故郷の山を追われた動物たちは、行くべきところもなく、死に絶える他はないのでしょうか。草や、木や、虫たちともまもなくお別れです。彼らも、生きることが出来ません。

茨城県知事は、本年度五億円の費用で、林道の舗装を実行するそうです。水戸の自然保護協議会や、土浦の自然を守る会では、私たち筑波の動・植物を守るために、この林道の舗装工事反対運動を起すつもりです。美しい自然を目先だけの小さな利益だけで、破壊してしまうことが許されるかどうか、そのことを皆で真剣に考えてぜひこの反対運動に御協力下さい。

（奥井 清）

× ×

× ×

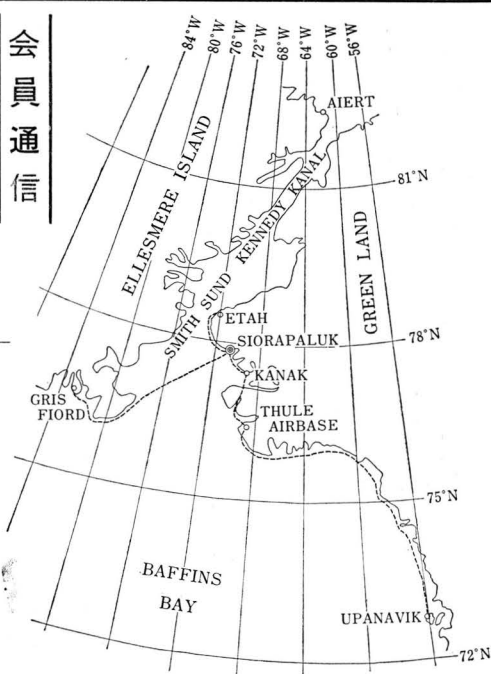
会員通信

グリーンランド便り

植村 直己

第二信

グリーンランドに入ってから四ヶ月、私のグリーンランド生活も、すっかり板についてエスキモー人と親しくつき合ひ、極地の生活も楽しくなりました。九月、当地に入った当時、村の前のアザラシ、クジラが氷山のまわりを泳ぎまわっていたフィヨルドも、今は氷原となり、犬橇が唯一の交通路となっています。気温は十二月に入り-18℃(を)を下してあります。太陽が十月下旬に消えてから屋間の明りは遠のき、今では二十四時間天頂に近い北極星を中心にして北斗七星がぐるぐるともわっているのが見られます。私の犬橇訓練も順調なすべり出です。十一月中旬よりエスキモー犬を買い、犬橇の訓練を開始、九頭の犬とカザマスキー製作の橇で、十二月十八日現在星空のついで、既に、一、〇〇〇Kmの犬橇の旅を終り、今年中に南極横断の半分の距離一、五〇〇Kmをこなす予定です。



太陽が昇る、来年の春には、シオラバルクを中心に、南部ウパナビックの町へ、そして北の方には、北極海近くまで、ロングランを行ない、来年の五月末までに一万Kmを走破する予定です。十二月初めに、日大北極遠征計画の一環としてのエルズミア島遠征の準備のために大島育雄君(本会会員)も私のところへやってきて、彼も懸命に仕事を始めております。

会の皆様によろしく
(十二月十八日付、シオラバルクより、松田宛)

第三信

二月十二日、明後日は、この水にとざされた極地に、四ヶ月ぶりに太陽が還ってきました。楽しみです。十月から全く見られなかった太陽、冷たく天を覆う星空には少々あいていてるところです。十一月からの一月末にかけて、二、〇〇〇Km以上の犬橇の旅を、チェーレを中心に沿岸水を行きました。今、南部ウパナビック(Upernivik)へ、往復二、〇〇〇Kmのロング・ランの

旅の途上にあります。途中カナック(チェーレ基地の北一〇〇Km)へ出て、明日は六〇〇mの水河の峠を越し、チェーレを経て一路、内陸からは出す水河沿いに沿岸水を南下する予定です。この旅には、当初大島君と一緒にいくことにしていましたが、出発直前に彼はインフルエンザにやられ、私一人で行くことになりました。途中でエスキモーを一人同伴する予定です。三月にはまた、シオラバルクへ帰り、カナダ領エルズミア島南端にあるグレース・フィヨルドのエスキモー村へ一ヶ月の旅行を行う予定です。二月の最近の気温はきびしく-30℃を越す日が続きます。犬は現在13頭、私の唯一の家族です。

大島君も、エスキモー人に気に入られ、懸命にエスキモー語の勉強から犬橇の訓練と元気に励んでいます。風邪も大したことはいない様ですから心配なく。会の皆様によろしく、
(二月十二日付カナックにて松田宛)

(注)植村、大島両会員の連絡先は、
Storapaluk, Thule,
Greenland, Denmark

五竜岳の元旦

今年の元旦は縁起がよかった。台湾坊主のいたずらで、年末から山は吹き荒れていたが、元旦の朝早くテントの外に出てみると、風もなく満天に星が輝き、下には神城の灯が見えた。地に一軒一軒とよるようになっていた。

私は年の暮三十日の夜行列車で東京を発ち、大晦日には大遠見山近くにキャンプをしている学生達のテントに入った。

五竜、鹿島嶺の頂が赤味がかかる頃私は五竜岳アタックの準備がととのった。八時出発、赤、青、黄などカラフルな防寒具に身を固めた学生、O・Bの十三名は、数日前鹿島嶺アタックの時につけたトレールを登る。

五竜小屋への稜線に出る頃から天候が少しずつくずれだして強い横なぐりの風が雪の塊を眼の中にたたき込み、それがとけて頬をつたい顎ひげの所で氷塊となった。学生の一人は長い顎ひげを伸ばしていたが、そこに大きな氷塊が出来て踊っていった。取ってやろうと思つて引ばつたら、ひげまで抜けて大笑いした。

頂上直下の急斜面に学生達がザイルを固定しておいたので私達はそれを使って登ろうとしたが、上から他のパーティーが勝手に下りてくるのでいつまでも私達は上に行けない。他のパーティーのザイルを利用する時には諒解を得るとか、安全性を確かめるのは常識である。他人も使っているから自分達もいだろうというつもりだろうが中にはアイゼンでザイルを踏んで行く者がいたのだ、そつと注意したら妙な顔をして黙って行ってしまった。

山頂はカラフルな若人達で賑わっていた。強風が吹き荒れてはいたが何となく元旦の朝に相応しいのどかさを感じた。気がつくともすぐ富士山にはいかな雲がかかり、すぐ近くにも薄気味の悪い暗い大きな雲塊が迫っていた。

大いそぎで下り始めたがその時すでに遅く間歇的に襲う三十〜四十mの強風と雪塊に足をふらつかせながらテントにもどった。気象予報は暮から正月にかけて山は猛吹雪になることを繰り返し警告していた。予報は適中して山は荒れ多く遭難者が出た。私達の近くにいたパーティーの中から犠牲者が出た。五竜岳周辺はその後荒れに荒れた。私達が登った元旦の朝の数時間だけが静寂な時であった。

ポスト・モンスーンに北里大学の学生達とネパール・ヒマラヤに入る私にとって、五竜山行はまことに意義深いものであった。
(河村栄二)

原稿募集

本会報の原稿を募集します。初めての方も、新入会の方も、振って投稿下さい。

内容 内容は紀行文でも山に関する研究でも、あるいは感想でも随筆でも結構ですが、日本山岳会の「会報」であることをお忘れないうちにお願ひします。記名に限りません。

長さ 長さも自由ですが、紙面の関係もあり、なるべく一頁以内に収まるようお願いします。会報一頁は一行十七字で二百行です。できる限り一行十七文字でお書き下されば幸いです。

掲載 この会報に載せるかどうかは本会の編集委員会が決定します。載せると決まったものうち、時間的に急ぐものや、季節性の強いものは、なるべくそれに応じて掲載しますが、何月号に載せるか、何面で扱うかは、いっさい編集委員会にお任せ下さい。紙面の都合や、内容が会報向きでないとか判断された結果、掲載しない場合は、原稿をお返しします。またあまりに長い場合は分割したり、内容が部分的に不適当な場合はカットしたり、訂正することもあります。特に他の団体との関係や、国際的に影響するような場合は寄稿者に無断で修正することもあります。

写真等 文章に伴う写真は載せますから、原稿に添えてお送り下さい。ただし紙質の関係で鮮明なものに限りません。地図等も黒ではっきりお書き下さい。割付けの関係で、写真、地図等の位置、大きさは編集委員会に御一任下さい。どんなに立派な写真でも紙面の六分の一以上を一枚で占めることはできません。

稿料等は、会報の性質上、差上げられません。

『山日記』をめぐる

意見交換会の座談から

昭和五年に第一輯が発刊されてから今年で三十八輯を数える『山日記』について、生みの親の一人である松方さんをはじめ、育ての親として面倒をみて下さった方々、そして現在も愛好して毎日『山日記』を使っておられる諸先輩にお集りいただいたて去る一月三十日に御意見を承る会を催しました。

出席者は松方三郎、林和夫、伊倉剛三、坂下心一、藤島敏男、望月達夫、渡辺公平、折井健一、田辺主計、山崎安治、加藤泰安、村井米子、島田巽、成瀬岩雄の諸氏。編集室側から広島三郎、坂本矩祥、松丸秀夫。会の正確な記録がとれなかったため、話の内容を『山日記』全体の評価と本年度版をも含めたいままでの内容に合わせて個別の(項目別)に整理してみました。

まず日記欄ですが七十三年版は数年来続けた自由日記形式を日付を入れた普通の様式に改め、日曜、祝日は朱刷りにしました。これについては山に限らず日常生活の予定、記録までをいわば手帖代りに常用しておられる藤島さん松方さんからは使い易い、自由日記形式のときは罫を引きたして、使い易いものに工夫する手間が大変であった。また常時『山日記』を持っていたと例えば退屈な会議のとき時間を過ごすのに楽しく役立つ。それで洋服のポケットを『山日記』に合わせて大きくしてある。(松方) 今日お集まりの方々はほぼ日記形式がよいという御意見でしたが、他方には日記欄の今年の改悪は失望の極み、これでは興のおもむくままに筆を走らせる自由なスペースが全くなく、手帖と少しも変わるどころがない(読者カード)と言った自由日記形式の御意見が必ずあります。

休日を朱刷りにしたのは記入欄を美しくして、いくらかでも楽しいものにするためでした。

基礎的記事について。学生の山行に一所に参加して沈黙があったときなどは『山日記』の巻頭にあった『山に登る人々のために』は、いろいろな意味でよい教科書の役割りを果たしていたと思う。単なる技術のことなら誰にでも書けるであらうが、リーダーシップのことは、登山に対する考え方などについては、長い経験のある人の珠玉の文章は価値の高いものであり、必要なものである(山崎)。若い人に親しまれるもの、若い人がもっと活用出来るような編集という話があったが、内容も勿論大切であるが、要はそれを表現する文章の問題である。よい文章であれば、あまり年齢を云々することはないであらう(田辺)。基礎的な記事も大切であるが、山登りの知恵、或は旅行の知恵と言った記事があれば非常に便利であらう(松方)。大正の頃に出た本で山野跋涉法と言ったのがあった。あれなど『山日記』に載せたら面白いと思う。『山日記』の内容にもっと若い人たちが興味をもつものを探り入れたらどうか。『山日記』の対象として考えられる読者は大人で年は若いマセているものが多いのではない(加藤)。

このあたりから発言された方々のお名前がはつきりいたしました。

スタイルについて。『山日記』の厚さはこれ位でよい。スタイルも悪くない。しかし、もっとたくさん数を売ること考えるならば分冊にすることは出来ないであらうか。イメージが固定しているのでむずかしいことであらう

が、分冊にすることで新鮮な変化も生まれるかも知れない。

発行のおくれについて。製作時間に余裕をもって編集を進めてほしい。今年のように一月末発行など言うことがないように。毎年十二月の初めには発行して欲しい。またテーマが繰り返されるのは止むをえないが、留意すれば次第に洗練された立派な内容・体裁になるはずであるから進め方に注意して欲しい。

定価が高い。定価が高すぎる。インフレと、発行部数ということであらうが、せめて、六百円位に出来ないものか。そのために広告を探り入れてもよいのではない。広告は身近で役に立つものを選べばあまり邪魔にはならないであらう。

表・裏見返しについて。フィート・メートル換算表、度量衡換算表、七曜表、各地域の山の日出日入時刻表、山の高さ・水の沸点と気圧の関係、郵便料金表、NHK全国支局所在地と周波数、ラジオ・テレビ気象通報・天気予報時間表など『山日記』独自のものであり、神経のゆき届いたものである。とくに暦の七曜表、槍ヶ岳等の山頂の日出日入がわかる時刻表などは、東京天文台、伊勢神宮のものと同様日本三大暦の一つといえる。

遭難対策記事について。遭難予防対策と発生時の対策という二つの面がある。過去いろいろな人が執筆してきていて、その二面に対するウエイトのおき方の違いはあれ、いずれも力作であり通読して得られるものは大きい。

医療記事について。同じ筆者が二、三年づついても、毎年少しずつ手を加えている。また筆者が整形外科の専門だったたり、内科専門だったたり、精神科だったたりして、それぞれの見方があって、これも通読してみると面白いし、役に立つ。

世界の山について。吉沢氏が常に新しい資料をもとにして正確を期している労作であり、非常にわかり易い。ヒマラヤの山の高さについては、インド測量部が製した地図のフィートをもとにしている。その段階で端数を処理しているのを、メートルに換算する段階でまた端数が生じた場合、誤差の範囲が広がるわけだが、これも随分検討したことがあって、『山日記』の年輪の深さになっている。

日本の山と峠について。山日記独自のものであり、五万分の一の地図をもとにして、不明のところをいちいち現地へ出かけて調査したりして、正確なものにしている。『山日記』だから山のことは勿論異存はないし、誰でも興味のあるところであるが、峠があるというのもまたなかなかよろしい。

画と文について。今年度のもので言えば、坂本直行氏の画と文だが、楽しいページである。ただし毎年五枚ずつのせる必要があるかどうか。

山と人について。いわゆる息抜きの頁であるが、あまり重視してもいけないのじゃないか。『山と人』に関して言えば、例えばアフリカニスタンで旅する話ののっていたりして、山岳会の幅の広さを示している。

以上が、当日の会の大体のまとめですが、類書も出てきたりしております。山登り自体少しずつ変わってきています。油断すればマンネリ化して味気のない、読まれない、使われない『山日記』になるおそれがないにしろあらず。

編集室としては、この会の御意見や読者カードの御意見を参考に、今年度の山日記の編集方針を考えていきたいと思っております。現在のところでは、とにかく定価を下げる、即ち広告を採用することで、その実現の方向にもっていきたい。また体裁・内容

容については今年度は従来通りの考え方で、正確をモットーにやっていきたい。また分冊にするということを含めて、体裁・内容の再検討を長期的に進めていき、今年度はその準備期間として、いろいろな方面から検討していきたいと考えております。皆様の御協力御支援をお願い申し上げます。(松丸秀夫)

『山岳』覆刻版

第二期第二号もなく発売、初期『山岳』の覆刻は図書委員会の手によって着々とすすめられておりますが、毎日新聞・読売新聞・東京新聞に紹介されたこともあって、ルームには会員はもとより外部からの希望者も殺到しております。五月下旬には予定どおり、第二期第二号が出来上りますので、希望者はお早目に申し込んでください。

▽第二期第二号の主な内容 甲州国司岳紀行(荻野音松) 続・日本アルプスの南半(小島島水) 赤石岳登攀記(高橋誠一郎) 飯綱山(志村昌隆) 越中立山の偉観(大平晟) ほか 付録として大和国大台原山上略図(白井光太郎作製) 日本山岳高度表(梅沢親光作製)を収録。

▽頒価千八百円 送料荷造代二百円

★上高地山岳研究所

募金状況(48・4・15現在)

※応募募件数四八七件

※金額 四、一一一、九〇三元

※目標額対比 八二・二%

いよいよ研究所のオープンが間近に迫りました。募金は目標額以上を目指しておりますが、会員諸氏のご協力をお願いします。完成後の使用規定等については信濃支部で作成中です。

会 員 通 信

信濃支部

アンナブルナ登山隊より

出発までの御支援のほど有難うございました。バンコクの暑熱に汗をかいて、翌三月四日カトマンズに到着、日本の五月を思わせる、さわやかさがありました。ランジャン氏経営のグレート、ヒマヤン、エクスプレスのすぐ前に借りて、一軒に京都登攀クラブ中と同居して、ごく精力的に市内を徘徊、公式の訪問も済ませました。ネパール銀行でのドルとネパール、ルビーの交換は、一対一〇・五ですが、少しでも汚損したものは全部駄目でした。何しろ一つの机に二、三人の男が立って、待たされたあげくに、「このおれは駄目」などと返されて、まさにぐったり。駐車禁止の立札を持った男が三人もいるのを見て、この国の就職難がややうなげますが、隊長は食堂にウェイトルスがまったくないのを残念がっております。

料金は十八ルピー十八パイサ、途中で白堂々のヒマラヤの山が宙空に浮んでみえるなど、なかなか楽しいドライブでした。

野菜などはやはりカトマンズで購入する方が安く、ボカラでは、じゃがいもと玉ねぎを買い入れることにしました。装備に関してもダウラギリにきたアメリカ隊が一部の装備買入れに東奔西走した由、特にクライマーゴグダがほとんどみつからなかったと聞きました。

水に気をつけるよとの話を聞いておりましたが、九日は全員朝から腹痛と下痢でダウン、終日飯抜きで過ごしたわけですが、シニルバ連中のよく食べること、山へ入ったら食料全部、彼らの胃の腑におさまってしまうのではないかなどと余計な心配までしております。

下痢は一日で治まり、明朝キャラバンに出発します。ポーター一七〇人を超える、いささか長い行列になりそうです。ではまた後便にて。(松永敏郎記、坂下心一宛)

図書紹介

岩と氷河の山々

ニュージランドアルプス
登山記録
国鉄山岳連盟編

国鉄山岳連が、国鉄百周年および国鉄岳連十五周年を記念して計画した、一九七二年ニュージランド親善登山隊の記録である。

思えば一九六二年、佐藤テラ隊長以下四名の女性が、はじめてN・Zアルプスの山々を訪ねてから十一年、隊員の一人として参加した私にとって、このN・Zアルプスの写真や記録は、再び彼地の山々を自ら歩いているような錯覚におちいるほどで、まことに楽しい。

十年ひと昔というたとえ通り、当時は、N・Zといえどニューギニアと間違えられるほど、日本人にとっては未知の国であった。しかも渡航審議会の針の目のような、小さな穴をくぐりぬが、外貨使用許可をとらなければならない。最大の難関であった時代である。このような十年という長いようで短い間の日本の変貌からみると、N・Zの山々や人情が、少しも変わっていないというところが、また何よりうれしい。

その後、多くの登山隊、スキー隊がクック山をはじめ、周辺の山々に登頂し、雑誌や映画となって紹介されているが本著ほど、登山の記録としてまとまった資料は、他にみあたらない。ことに文献や情報とほしいダーラ山群については、日本人として第一歩を踏んだ記録は、大いに評価されるものである。

N・Zのパンフレットの案内に「世界でもっとも楽しい散歩道」としてされていたミルフォードサウンドを私たちが訪ねたが、サウンドフライトと称して、また天候に悩まされたことを思い出し、ダーラ山群での登山隊の雨と流水と汗にまみれたのルート探索や荷上げの苦闘が、手にとるようにわかるのである。

ットコをはじめ、ダーラ山群の五峰、タスマン地域でのクックとマルテブランの登頂、しかもクックには、全員登頂するというすばらしい記録である。これこそ粘りとチームワークの勝利であろう。

湯川団長以下十一名という大部隊は全国各地の職場から選ばれた国鉄岳連のメンバーだといふ。そのかげで協力した多くの人々、よい意味での国鉄一家なればこそと感嘆させられる。

あとがきに「N・Zアルプスを訪ねる日本の登山家に役立つことを念願し、事実を忠実に記録した」と述べている通り、教科書的な固苦しさを感じられないでもないが、ぼう大な写真と細かい記録は、資料としてまことに貴重なものがある。(小倉童子)

昭和四十七年八月
交通協力会出版部刊
A4変型判
カラー写真 四頁
モノクロ写真 三十二頁
ダーラ山群パノラマ写真
本文 七八頁

北ボルネオの旅

橋本 広著

かつて九山山房を訪れた著者は、備えつけのノートに山の絵を描いた。「きまは絵が描けて、たのしいね」山房の主人は、うらやましげにつぶやかれたという。

このたび、本格的なボルネオの紀行が出た。標題の書がそれで、深田久弥氏をうらやましげにさせたスケッチ風の絵がふんだんにもり込まれていて、たのしい雰囲気をももたせている。

本書は、昭和四十三年夏、富山県教職員山岳研究会という山好きな教員のグループが、マレーシアのキナバル(四一〇一m)に登ったときのもので、七章からなっている。

「タタン(ガイド)のカダザン語講義によると、ゆつくり歩くことを『パラパン』といい、ブッシュが『ばい』生えている状態を『ワヤワヤ』という。私たちは、ワヤワヤのところを、パラパンで登った。――」

などと、著者は第六章「登山」でも興に乗って綴っているが、しかしこの第六章が本書のハイライトではない。なんといってよ読ませるのは、山に取りつくまでの準備のことや、そこま

での旅のようすを書いた第一章から第五章までである。

隊員は五人だったが、隊長の著者(本会々員)をのぞく四人は二隻の貨物船に便乗して、ただ同然の、ひと七千円でボルネオ島に渡る。その船会社との交渉のなんとあざやかなことか。

現地のことばを話せないことは決して自慢にならない。著者は、「中学から大学まで十年も英語を勉強しては、簡単な英会話も出来ない」と、教育者らしく今日の教育のあり方をなげきながら現地に飛ぶ。しかしこの隊は、もともと人柄で充分にそれをおこなって余りあったことが、さりげない叙述の裏にさわやかに語られている。

ともかく、本書を読むものには、これらに加えて、ボルネオ島の歴史・地理・風俗・歴史では、たとえば有名な「死の行進」など一冊のほかに、海外旅行の基本的なこと・準備・手続・渡航・現地での生活などいづれがわかる余徳がある。

それにしても、帰りの航海で台風に遭い、予定日ははるかに超えて帰国した隊員の妻が、隊長にいったことがふついている。

「もう、うちの人を何処へも誘わないで下さいよ先生」

ちなみにこの隊員夫妻は、著者の教え子であった。うらやましきくらいにチーム・ワークのよい隊であった。著者のもっとも自慢したいところであろう。

なお、中部ヒマラヤやヒンズークシなどに旅した著者には、画文集『巔抒情』(昭和四十二年)がある。

昭和四十八年三月 新紀社刊
A5判 二六六頁 グラビア、挿絵
定価一五〇〇円

『山岳』第67年について

一昨年以来『山岳』の刊行が大変遅く、各員の皆様方に甚だご迷惑をおかけしています。深くお詫び致します。遅刊の原因の大きなものが、原稿の集まりの甚だしく遅れる点にあることも、この際一言しておきたいと思ひます。今後共ご執筆の方は、切を厳守していただきたいと思います。

さて第67年(一九七二)は左記の内容で編集をおえ目下印刷所に回っておりますので、もししばらくお待ち下さい。

記

・カンジロバ(一九七二) 阿部和行
・マナスル西壁 小原和晴
・アタカマ高地の登山 向一陽
・バタゴニア氷床横断 上智大学
・叔父板倉勝宣のこと 板倉勝正
・アフガニスタン中央高地 梶正彦
・ランタンヒマール踏査 梶正彦
・パウダンピーク登頂 増江俊三
・ティリチミール 都竹勝
・ピアーズ峰登頂 国鉄山岳連盟
・ダーラン山群の登山 原全教
・山の地名と歴史 (追悼)

武田久吉氏(藤島敏男・戸沢英一・春田俊郎)、牧野平五郎氏(中田勇

複写受付事務取扱について
日本山岳会

1. 本会は会員に対して文献複写を行います。
 - (1) 複写の種類
乾式電子複写機(ゼロックス)によるA4版、B4版の2種類
 - (2) 複写出来る資料
本会所蔵の図書
 - (3) 複写出来ない資料
・著作権侵害のおそれのあるもの
・地図、その他法律により複製が禁止されている資料

2. 申込方法

- (1) 複写の申込みは図書の一部に限り、一人1件につき1種類を1部とし、全冊の複写はお断りします。
- (2) 来会して直接複写を依頼しようとする場合は所定の申込用紙に記入し、当該図書の頁を指定して申込み下さい。
- (3) 文書による申込みの場合は、住所、氏名、会員番号、複写希望の図書、著者名、ページ等を具体的に記入の上、申込み下さい。

3. 申込取扱い業務

- (1) 複写機の操作は原則として事務局員が行ないます。ただし事務局の事務能力を超える場合は、その申込みを制限することがあります。みづから複写しようとする場合は担当者の許可を受けて下さい。
- (2) 複写完成品の引渡し期日は、申し込みを受けた日から7日と致します。

4. 複写料金

- (1) A4版、B4版1枚につき30円です。
- (2) 郵送申込みの場合は次に定める郵送料を加算して、郵便小為替で前納して下さい。

2枚まで	20円
6枚まで	25円
15枚まで	55円

吉、岡本徳之助氏(望月達夫)、佐藤隆太郎氏(望月達夫)、岩崎京二郎氏(坂倉登喜子)、逸見真雄氏(小原勝郎)、村井栄一氏(藤井連平)、大島堅造氏(松井久之助)、袋一平氏(望月達夫)、永原輝雄氏(望月達夫)、水田健之輔氏(石原憲治)、入沢文明氏(成瀬裕雄)、真田昌孝氏(村尾金二)、手塚英信氏(中野和郎)、千々岩玄氏(千々岩助太郎)、成田潔思(岡部紘)

遙かなる山やま(渡辺兵力)、われらのものならぬ世界(原真)、中央アジア探検史(望月達夫)
会務報告、英文梗概、写真地図多数入
A5判三百余ページ
編集委員 望月達夫、中島寛、原真、堀内章雄
刊行予定 来る六月(山岳編集委員) 国際アルピニスト集會参加募集

二年に一回、シャモニの国立登山スキー学校において、フランス山岳連盟主催で開かれていたこの集會は、一九七一年度は同校校長の交代などの理由によって中止されていましたが、今夏は七月から八月にかけて二十日間にわたって開催される見通しです。この集會は登山技術の講習会ではな

く、約三十カ国の第一線に活躍するアルピニストを、各国二名ずつ招待し、各自の責任において、その目的としての諸ルートを登るものであり、同校教官はルートのコンディショニング、天候などのアドバイスをするだけです。技術的に完成されたアルピニストが一同に集まる、いわば山のオリンピックとでもいえます。参加者が登ったルートは集會後に発表され、各国に配布されます。J・A・Cとしては今夏も招待を受けた場合は、二名の会員を参加させたい意向です。参加希望者は多数あるものと思われませんが、困難な登攀に自信のある方だけ応募下さい。なお集會期間中の全費用はフランス山岳連盟が負担致します。二名のメンバーの決定は海外連絡委員会が行ないます。

一、申込先 海外連絡委員会
二、申込期日 五月末日まで
三、二名連記で申込みのこと(単独申込みは受けつけません)
四、くわしい登攀歴(岩場と冬山および海外の経験。参加希望のパートナーと一緒に登ったルート)をつけること
ヨーロッパ・アルプスの困難なルート(五級・六級)の登攀歴のある方を最優先します。

なおお電話、すくなくとも英会話が出来ることが条件です。

辻村太郎氏秩父宮記念学術賞 授賞祝賀会出席者

田辺主計、山崎安治、岩永信雄、中田勇吉、伊倉剛三、板倉勝正、藤島敏男、三田幸夫、日高信六郎、望月達夫、佐藤テル、近藤信行、村井米子、田中薫、横有恒、佐藤久一朗、藤井運平、島田異、山崎金次郎、折井健一、武田満子、三枝守博、三枝守維、成瀬岩雄、瀬名貞利、野口末延、藤本茂樹、浅輪幸久、古沢肇、織内信彦、斎藤かつら、交野武一、須田紀子、沼倉寛二

図書室便り (昭和48・3)

新刊図書受入報告

新潮社寄贈
(1)新田次郎著『栄光の岩壁・上』 昭和48
(2)新田次郎著『栄光の岩壁・下』 昭和48
日本リダーズ ダイジェスト社寄贈
(1)ライバック著・武内孝夫訳『ハイアドベンチャー』 昭和47
女子登攀クラブ寄贈
(1)女子登攀クラブ編『アンナブルナー女の戦い』7577m 昭和48
本多夏生氏寄贈
(1)長崎大学土山岳会編『アフガニスタンの山と人』 昭和47
松沢憲夫氏寄贈
(1)松田清著『インド・ネパール・セイロン』 昭和48
塚本宏氏寄贈
(1)法政大学山岳部編『山想』第2号 昭和48
(2)法政大学山岳部編『山想』第3号 昭和48
橋本広氏寄贈
(1)橋本広著『北ボルネオの山旅』 昭和48

児島勘次氏寄贈
(1)児島勘次著『登山履歴』 昭和48
定期刊行物受入報告
【部報・会報類】
(1)兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』No. 60 (48-3)
(2)日本地図資料協会『古地図研究』No. 37 (48-3)
(3)国立公園協会『国立公園』No. 278 (48-2) No. 279/280 (48-3)
(4)京都山岳会『京都山岳』No. 575 (48-3)
(5)尾瀬自然保護研究会『おと』No. 12 (48-3)
(6)尾瀬の自然を守る会『尾瀬ニエー』No. 12 (48-3)
(7)日本自然保護協会『自然保護』No. 128 (48-3)
(8)低く山を歩く会『低山』No. 93 (48-3)
(9)神奈川県山岳連盟『とむわ木』No. 33 (48-3)
(10)日本山岳協会『登山月報』No. 48 (48-3)
(11)日本登山協会『山と雪』No. 179 (48-3)

【雑誌】
(1)『アルプ』No. 181 (48-3)
(2)『岳人』No. 310 (48-4)
(3)『岩と雪』No. 30 (48-4)
(4)『山と溪谷』No. 415 (48-4)
【その他】
(1)日光の自然を守る会『大自然』No. 9 (48-2)
(2)鹿児島大学山岳部『Festina lente』(3)ここの山岳会『月報』No. 139 (48-3)
(4)野村総合研究所『観光地における空の開放策の実態調査』
(5)東海大学体育会山岳部O・B会『アラスカ・カナダスキー登山隊計画書』73
(6)村井米子氏寄贈『Anima』No. 1

【新着海外雑誌】

1. "Alpinismus" '73-2.
2. "The Canterbury Mountaineer" Vol. 11, No. 41 '72/73.
3. "Österreichische Alpenzeitung" Jah. 90, Folge 1386, November/December '72.
4. "Panorama of Slovakia" '72-5.
5. "Rivista mensile" Anno 93, N. 10, Ottobre '72.
6. "U.I.A.A." No. 52, Décembre '72.
7. "Verkehrsbuch" Aus. 46, Winter '72/73.
8. "Die Alpen" N.1, Janvier '72.
9. "The American Alpine Journal" Vol. 18, No. 1, '72.
10. "Appalachia" Vol. 39, No. 2, December '72.
11. "Der Bergsteiger" Jah. 40, Januar '73, Jah. 49, Februar '73.
12. "Deutscher Alpenverein" Jah. 25, Heft 1, Januar/Februar '73.
13. "Deutscher Alpenvereins" Vol. 97, '72.
14. "Anuario de la Federacion Española de Montañismo" '71, 15. "The Geographical Journal" Vol. 138, Part 4, December '72.
16. "Mountain" No. 25, January '73

【部報受入報告】
堀川英司郎氏寄贈
"Sierra Club bulletin" (September '68~February '73)

計 37冊。

会務報告

日本山岳会経理に関する内規

第一条 本会の運営する事業に関する経理事務はこの規定によって正確かつ迅速に処理しなければならぬ。

第二条 本会の会計年度は毎年四月一日に始まり翌年三月三十一日とし、期末に決算を行なうほか毎月末ごとに月次決算を行なうものとする。

第三条 この規定によって作成すべき会計諸表は次の通りとする。

- 一、収支決算表
- 二、貸借対照表
- 三、財産目録
- 四、月別収支決算表
- 五、付属明細表

帳簿は次の通り設ける。

- 一、総勘定元帳
- 二、仕訳帳(仕訳伝票綴)
- 三、現金出納帳
- 四、固定資産台帳
- 五、経費明細帳
- 六、その他補助簿

第四条 経理に関する帳簿および書類の保存期間は文部大臣の主管に関する民法第三十四条の規定にもとづき十年以上とする。

第五条 経理担当者(月例会を除く)の任期は毎月末日における補助簿の残高と総勘定元帳の関係口座の残高とを照合しなければならぬ。

第六条 金銭の出納責任者は経理担当者とする。

第七条 この規定で金銭とは現金および預金(預金)をいい、現金とは通貨のほか手もとにある小切手、郵便為替証書などをいう。

第八条

第九条

第十条

日本山岳会旅費規程

(適用)
第一条 この規定は会員および職員が会務のため出張する場合で次に定めるものに限り支給する。

- 一、役員(会長、副会長、理事、評議員)が常務理事会の承認を得て出張する場合。
- 二、評議員がともに開催する評議員会(月例会を除く)に出席する場合。
- 三、支部長が支部長会議に出席する場合。
- 四、理事長または常務理事会の依頼により会員が出張する場合。
- 五、理事会または常務理事会の命により職員が出張する場合。

る場合。

(定義)

第一条 この規定における旅費とは交通費、宿泊費をいう。

(計算)

第二条 旅費はすべて順路により計算する。ただし天災地変、交通事故、用務などのやむを得ない事由によって順路を変更した場合に実際には通過した行路による。

(支給基準)

第四条 旅費の支給基準は次の通りとする。ただし、海外へ出張する場合はその都度定める。

一、汽車、汽船運賃 普通運賃(旅程が百km以上の場合は合にかり、急行または特急の利用を認める)

二、乗合自動車 実費

三、宿泊料金 三千円を限度として実費を支給する。

(支給の特例)

第五条 本規定以外に会務のためやむを得ない事由により要した費用は実費を支給する。

(旅費の前渡)

第六条 旅費は出発前概算額の前渡しを受けることが出来る。その場合出張終了後たちに精算しなければならぬ。

(旅費の支給)

第七条 出張者が帰任した場合は旅費請求書に所定の事項を記入の上担当理事の承認を受け、支給を受けるものとする。

付則

第八条 職員が通勤に要する定期券購入費および会務のために要する交通費は実費を支給する。

本規定は昭和四十七年五月十二日より改訂実施する。
経理に関する内規、旅費規程は、四

十七度六月理事評議員会で承認されたが(本誌三二六号参照)、紙面の都合上掲載が遅れたことをおわびいたします。(編者)

会 員 異 動

終身会員 (47年12月)

三〇四三 川崎 精雄

退会会員 (48年3月)

三六二六 志浦 博四

四七〇九 野中 正

五〇一〇 高場 常雄

五五九一 田中 彦作

六二〇五 A. V. K. Murray

六八二一 望月 重臣

物故会員

三二五四 武内 重雄 昭和四八・二

九逝去

六四七〇 黒瀬 公夫 昭和四八・二

二・三逝去

七〇九 石井 鶴三 昭和四八・三

一七逝去

一五二四 足立源一郎 昭和四八・三

三・一逝去

ルーム日誌 (48年3月)

2日(金) 辻村太郎名誉会員秩父宮記念学術賞受賞祝賀会

9日(金) 常務理事会

10日(土) 青年懇談会

12日(月) 集會委員会

13日(火) 図書委員会

14日(水) 会報委員会

16日(金) 山日記の会

19日(月) 青年懇談会

22日(木) 婦人懇談会

青年懇談会

23日(金) 理事評議員会

28日(水) 書評委員会

29日(木) 山岳史懇談会 講師 三枝

守博名誉会員

30日(金) 青年懇談会

31日(土) 医療委員会夏山診療所連絡

委員会

ルーム委員会

三月中来室者 三八五名

あとがき

新会長、副会長も決まり、新ルームへの移転も間もなく終わり、本会もまた飛躍的な発展をしたいものです。それを心に期して、第一面を総会記事としました。みんなで会を盛り上げましょう。

「山と蝶のものがたり」はちょうど一年間の連載を終って、今回が最終回となりました。この連載が始まって間もなく、文中にしばしば登場された武田久吉、島山悌成両先生が亡くなりましたのはかえすがえすも残念です。亡くなられたといえ、最近、日本の画壇の長老で、本会の昔からの会員である石井鶴三、足立源一郎両先生の訃を聞くのも淋しい限りです。本号は十二頁を通じて写真の全くない一本調子のものでした。次号から工夫します。

昭和四十八年五月十日発行

東京都文京区湯島一六六一

利根川商事株式会社

発行所 法人 日本山岳会

編集代表 春田俊郎

(813) 二二八六(代表)

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂

問い合わせ先

三井航空サービス株式会社

旅客部団体課

東京都港区新橋1-18-1

電話(504) 0271 (大代表)

“ヒマラヤ山岳の旅18日間”

期 間：昭和48年11月11日～11月28日

昭和49年3月10日～3月27日

費 用：¥358,000 (ローン可)

定 員：15名

御案内人：エベレストビューホテル社長
宮原 巍氏

安全対策：医師並びに参加者の皆様の安全を図るために、現地人医師を第9日目より15日目までエベレストビューホテルに滞在せしめると共に、酸素ボンベの用意も致しております。

日 程：

第1日目 東京→ニューデリー

第2日目 ニューデリー→カトマンズ

第3日目 カトマンズ滞在

第4日目 カトマンズ→ポカラ

第5日目 ポカラ滞在

第6日目 ポカラ→カトマンズ

第7日目 カトマンズ滞在

第8日目 カトマンズ→ルクラ：徒歩にてモンジョへ(モンジョテント泊)

第9日目 モンジョ→ナムチェバザール

第10日目 ナムチェバザールより徒歩にてエベレストビューホテルへ

第11日目 エベレストビューホテル滞在

第12日目 エベレストビューホテルよりタンボチェトレッキング(タンボチェ泊)

第13日目 タンボチェよりエベレストビューホテルへ

第14日目 エベレストビューホテル滞在

第15日目 エベレストビューホテル→カトマンズ

第16日目 カトマンズ滞在

第17日目 カトマンズ→カルカッタ

第18日目 カルカッタ→東京

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

ブータン感傷旅行

小方全弘著

〈菊判280頁〉定価980円

森林・草原・氷河

加藤泰安著

〈A5判482頁〉定価1,500円

すこし昔の話

初見一雄著

〈四六判400頁〉定価1,200円

遠い山・近い山

望月達夫著

〈B6判334頁〉定価960円

山の古典と共に

大島堅造著

〈四六判280頁〉定価1,500円

雪山・藪山

川崎精雄著

〈A5変型判340頁〉定価1,200円

雪原の足あと

坂本直行著

〈B5判206頁〉定価2,800円

遙かなる未踏の尾根

マカルー1970年

日本山岳会東海支部

〈B5判430頁・カラー64頁〉定価4,800円

山日記1973年版

日本山岳会編

〈A6判344頁〉定価850円

山 岳

日本山岳会編

〈A5判〉

66年	2,300円
65年	2,000円
64年	2,000円
63年	2,200円
62年	2,000円
総索引	1,000円

国立公園カレンダー

国立公園協会編

〈A5判リング綴り〉定価960円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編

〈B6判202頁〉定価480円

山で唄う歌1集・2集

戸野昭・朝倉宏編

〈A6判126頁〉1集240円・2集280円

いろいろばた

南会津山の会

〈B24どり判320頁〉定価1,900円

シブトンの自叙伝

未踏の山河

大賀二郎・倉知敬訳

〈A5判440頁〉定価1,900円

日高山脈

北大山の会編

〈菊判362判頁〉定価2,200円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著

〈菊判584頁〉定価2,500円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

〈A変型208頁〉定価3,600円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編

〈A5判350頁〉定価900円

登山・スキー用具専門店

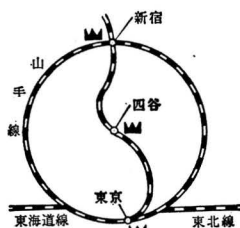
山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736

●買いやすい
山の店

●北へ来たら
山の店

●フレッシュな
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地

TEL (351) 7432-1912

八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五

TEL (271) 1560-8575

新宿店 新宿ステーションビル四階

サービスショップ

TEL (352) 65664

日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番

なるべくなんにも
持たない方がいい
けど、どうしても
要するものがある。
なにしろ人間で、すかり
たして登山、すかり
たしてスキー、すかり
たして、

どうしても必要なもの
をここにそろえて
まいる
主責任はもっています

かたるびンティ
でんや 281-8456
中央区・八重洲4の1

秀山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1

PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京都・中央区・銀座 2-4-5 (561)3600・(567)9031
東京都・中央区・銀座 2-4-4 (561)0866 スキー店
大阪店・北区・豊橋路上一丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・市・路 町 1-4 (28) 34440

